造血器腫瘍における腫瘍崩壊症候群の治療とその治療時の電解質変動の検討

重見 博子¹⁾ 川道 美里²⁾ 大岩 加奈¹⁾
 森田美穂子¹⁾ 松田 安史¹⁾ 上田 孝典¹⁾
 山内 高弘¹⁾

背 景

腫瘍崩壊症候群 (Tumor Lysis Syndrome: TLS) は、化学療法に際して腫瘍細胞の迅速な崩壊に伴い、高尿酸血症、急性腎不全、さらに高カリウム血症、高リン血症、低カルシウム血症などの電解質異常を呈する緊急事態である。予防、治療に中間リスク群ではアロプリノールが用いられ、高リスク群では尿酸酸化酵素であるラスブリカーゼが使用される。ラスブリカーゼは高尿酸血症に著効し、致死的な病態を回避できる。我々は、ラスブリカーゼ投与終了後も約2週間にわたり持続した低尿酸血症を電解質の変動により検討した。

0.4500), eGFR 値: 42.1 ml/min/1.73 m² から 65.2 ml/min/1.73 m² ($p = 0.0090$) であった。尿酸値の減少に伴い、カリウム値、リン値、そしてカルシウム値も低下した。尿酸低値が持続中は、カルシウム値も低値である傾向が示された。

結 語

ラスブリカーゼは、投与後速やかに高尿酸血症を改善し、尿酸値を 1.0 mg/dL 以下に低下させる。治療後の尿酸値変動へのカルシウム値の関与が示唆された。

方 法

2011年3月から2016年2月までに当院で造血器腫瘍の治療のために入院した患者で TLS に対してラスブリカーゼが使用された 21 名に対して後方視的に尿酸値、カリウム値、リン値、カルシウム値、血漿クレアチニン値及び eGFR 値について治療開始時と治療後 (3~7 日後) について検討した。

結 果

ラスブリカーゼ治療前と治療 3~7 日後の血液・生化学検査で、平均値の変化はそれぞれ、尿酸値: 12.09 mg/dL から 0.94 mg/dL ($p < 0.0001$), カリウム値: 4.2 mEq/L から 3.9 mEq/L ($p = 0.0148$), リン値: 4.8 mg/dL から 4.1 mg/dL ($p = 0.1606$), カルシウム値: 9.2 mg/dL から 7.5 mg/dL ($p = 0.0036$), クレアチニン値: 1.89 mg/dL から 1.61 mg/dL ($p =$

1) 福井大学 医学部 血液・腫瘍内科

Hiroko Shigemi, Kana Oiwa, Mihoko Morita,
Yasufumi Matsuda, Takanori Ueda, Takahiro Yamauchi
Misato Kawamichi

2) 福井大学 附属病院 薬剤部